

不可欠な手段となっている。ルゴール撒布により口側の多発性上皮内癌の診断が容易になり、また撒布後の主病巣の形態分類は、組織分化度および上皮内癌併存と関連がみられた。ルゴール撒布後の変色の程度差を30倍の拡大像で検討すると5型に分類することができ、その差は上皮層内のグリコーゲン量に関連し、組織像も各型において特徴的な差がみられた。

66-3. 腹部疾患に対する超音波診断の意義

竜 崇正 (千大)

超音波診断装置の発達により、特に肝胆膵疾患において欠くことのできない検査法となっている。超音波画像診断のみでなく超音波ガイドに臓器を穿刺することにより更に幅広い診断ができる。胆管造影、膵管造影、門脈造影なども超音波ガイド穿刺により容易かつ安全に施行でき、また吸引細胞診により悪性疾患49例中42例、86例が悪性細胞を吸引し、術前に確診できた。

66-4. 急性腎不全に対する新しい治療法

平沢博之 (千大)

我々は急性腎不全を細網内皮系 (RES) の食食作用の低下に起因した multiple organ failure の一分症としてとらえ、従来の治療法に加えて、人工的 RES としての direct hemoperfusion, 新鮮凍結血漿の大量投与、ヘパリン、ATP-MgCl₂等の投与による RES の賦活等の療法を施行したところ、救命率が有意に改善されたので症例をあげて報告した。

66-5. 胃癌免疫療法の controlled study の進行状況

落合武徳 (千大)

教室では昭和51年1月から BCG-CWS を用いた免疫療法の胃癌切除後の生存率に及ぼす影響を検討する目的で controlled study を施行した。その結果、stage III 胃癌では BCG-CWS 投与群の3生率は68.9%にあるのに比べ、化学療法単独群の50%生存率は21.7%と、免疫療法群に生存率の向上を認めた。そこで動物実験により、宿主介在性の抗腫瘍効果の認められた Nocondia CWS を用いた controlled study を千葉大第二外科とその関連施設14カ所において開始した。その進行状況について概観した。

66-6. 実験食道癌

小野田昌一 (千大)

教室では食道癌の移植実験として、人癌のヌードマウスへの移植を放医研の協力のもとに行っており、既に2年半継代している平岡株を始め、数種の株を継代している。また、家兎のV×2癌を用いた実験も行っている。発癌実験として PNUR (N-propyl-N-nitrosourea) 及び NHMI (N-nitrosoheptamethyleneimine) を用い、マウスの前胃並びに食道に扁平上皮癌の発生をみている。それらの概要について報告した。

66-7. 成分栄養法 Elemental diet の現況

碓井貞二 (千大)

ED 施行例は1979年12月現在194例で、食道癌の術前術後管理、大腸疾患の術前管理をはじめ炎症性大腸疾患、消化管瘻孔、肝胆膵疾患などにも広く用いられている。ED は消化を必要とせず吸収が容易で、特別の管理も不要という利点を有するので、今後適応を拡大して、肝不全、腎不全、小児用 ED の開発を目指したい。